# 学 位 論 文 要 旨

学位論文題目　談話におけるフィラー待遇の研究
—「ま(ー)」と「なんか」について—

申請者氏名　魏春娥

本論文の目的は、日本語母語話者の自然談話のデータに基づき、「ま(ー)」と「なんか」を取り上げて、フィラーの待遇性を検証することである。

日常会話で、私たちの多くは、言いよどみなくしゃべるのではなく、「ま(ー)」「なんか」や「えーと」「あのー」などを発しながら発話する。「ま(ー)」「なんか」や「えーと」「あのー」などのフィラーの一見無意味な語の存在は、書き言葉には見られない話し言葉の特徴の一つである。これらは伝統的な国語学では「感動詞」「間投詞」と呼ばれているが、近年談話分析研究が盛んになり、話し言葉が研究の対象となるにつれ、フィラーは注目されだした。

私たちは、コミュニケーションする際に、相手との上下親疎関係により、常体を使ったり、敬体を使ったりして相手との待遇関係を調整する。

本論文では、相手に対する待遇が、語彙的な待遇表現の使い分けだけではなく、「ま(ー)」「なんか」や「えーと」「あのー」などのフィラーにも現れることを主張する。つまり、フィラーにも待遇性があることを提示する。

フィラーの待遇性を検証するため、日本語母語話者を対象とする 8 つの会話調査を実施した。会話調査では、協力者の親密度により、「初対面会話」と「知り合い会話」の 2 種類がある。本研究では、4 人の 20 代の女性話者どうしの会話、及び 20 代の女性と 60 代の相手との会話に現れる「ま(ー)」と「なんか」を考察した。

その結果、「ま(ー)」と「なんか」の出現位置により、フィラーは「統語的」、「談話的」の 2 種類に分けられることが判明した。

また、「ま(ー)」と「なんか」の出現頻度を比較、分析した結果、「ま(ー)」については、「初対面会話」、「知り合い会話」に関わらず、20 代話者の同世代どうしの会話には「ま(ー)」があまり現れなかった。一方、年上の相手との会話には「ま(ー)」が多く現れた。「なんか」については、談話的な「なんか」が、「初対面会話」、「知り合い会話」ともに、20 代話者の同世代どうしの会話に多く現れた。一方、年上の相手との会話には「なんか」が少なかった。統語的な「なんか」は、「初対面会話」の 20 代話者の同世代どうしの会話に多く現れ、年上の相手との会話では少なかった。「知り合い会話」では、年上の相手との会話(1 ペアのみ)に「なんか」が多く現れた。

以上の結果から、フィラーの使用には個人差があるが、全体的に「ま(ー)」は待遇レベルが高く、「なんか」は待遇レベルが低いことが分かった。従って、フィラーには待遇性があ

ると言える。

以上の研究から得た結果に対し、さらにデフォルトデータ（同世代・同性で親密な話者どうしの会話）による検証も行った。その結果、フィラー「ま(ー)」と「なんか」の待遇性は親疎に関係なく、世代差だけに関わっていることが分かった。

論文の構成は以下のようになる。

第 1～4 章は、まず、研究動機を論じた上で、談話分析、フィラー、及び待遇表現などの先行研究について述べた。そして、本研究におけるフィラーの定義をした。また、本研究の目的と研究方法を示した。

第 5～6 章は、4 人の 20 代話者の発話に現れた「ま(ー)」と「なんか」の例を「統語的」「談話的」の分類によって記述した上で、「ま(ー)」と「なんか」の相対的な出現頻度をまとめた。

第 7 章は、4 人の 20 代話者どうしの会話、及び 20 代女性と年上の相手との会話に現れた「ま(ー)」、「なんか」の分布と出現頻度を比較、分析した。またその上で、デフォルトデータによる検証も行った

第 8～10 章は、本論文の研究結果をまとめた。また、本研究の問題点を述べ、今後の課題を記述した。

（様式９）

# 学位論文審査の概要と結果

| 報告番号 | 東アジア博 甲 第 92 号 | 氏　名 | 魏　春娥 |
|---|---|---|---|
| 論文題目 | 談話におけるフィラー待遇の研究 ―「ま（ー）」と「なんか」について― | | |

## （論文審査概要）

本学位論文の目的は，日本語母語話者の自然談話データを対象とし，従来感動詞として扱われてきたフィラーに待遇性があるかどうかを検証することにある。特に，「ま（ー）」と「なんか」を取り上げて，実証的な分析を行っている。

本論文の構成・概要は，以下の通りである。

まず第１章は，本論文の研究動機，構成を記している。

第２章では，談話分析・フィラー・待遇表現に関する先行研究について述べている。

第３章では，従来の研究における「遊び言葉」「言いよどみ」といった用語が示された上で，フィラーの定義が成されている。本論文での定義は，「発話者が何らかの心的操作を行っている最中に発する場つなぎ的な機能を持つコトバ」としている。

第４章では，本論文での目的と研究方法を記している。20 代話者どうしの会話，20 代と 60 代話者の会話を録音・収集し，書き起こしたものを分析対象としている。話者どうしの関係は，初対面・知り合い・親密という３種類となっている。

第５～６章では，４人の 20 代話者どうしの会話に現れた「ま（ー）」と「なんか」のデータを記述した。ここでは，２つのフィラーの相対的な頻度を観察することによって，その要因を「統語的」なものと「談話的」なものとに分類している。

第７章では，２つのフィラーの記述を比較している。ここでは，20 代話者どうしの会話では，「ま（ー）」があまり現れず，「なんか」が相対的に多く現れたことが示されている。ただ，「なんか」の分布は，例えば話者が焦点化している要素の直後など，談話的な要因に関わる位置で頻度が高い。このことから，「なんか」は，統語的な空き間に入るというよりも，話者の談話運営上の空き間に入る傾向があると考えている。一方，20 代話者と 60 代話者の会話では，「ま（ー）」の方が相対的に多く現れている。このことから，「なんか」よりも「ま（ー）」の方が，相対的に高い（プラスの）待遇性を持っていることが判明している。ただ，第５～７章で扱った会話データの話者の関係は，いずれも初対面または知り合いである。非常に親密で尊敬度がゼロの間柄でも，同様の結果が導かれるのかが問題である。そこで，第７章では，このようなデフォルトの関係の会話データを収集し，分析を施している。その結果，親疎や尊敬の度合いは，フィラーの待遇性には影響しないことが判明している。

第８章では，本論文での研究結果をまとめている。

第９章では，本研究での問題点・課題を記述している。また，統語的な要因と談話的な要因を統合するような考え方として，言語単位の独立性という概念が提出されているが，これは今後の研究への展望となっている。

以上より，以下の点を評価できる。

１．創造性

フィラーの研究そのものは少ないが，従来の説を十分に理解した上で，フィラーの待遇性に関して新しい論点，仮説，証明方法が提示されている点は，極めて優れている。また，フィラーも含んだ感動詞類の研究，あるいは認知科学などの関連研究分野への貢献も明確である。

2．論理性

大量の言語データに基づき，仮説を適正に検証している点は極めて優れている。また，一貫性のある展開から結論が導かれている。

3．厳格性

先行研究は十分に渉猟咀嚼されている。また，話者の年齢差だけでなく，話者間の関係も考慮に入れ，緻密な議論を重ねている点は極めて優れている。

4．発展性

本論文は，フィラー研究の一つの側面を示したに過ぎないが，フィラー研究そのものがあまり見られないことを考え合わせると，今後の研究の指針となるだろう。また，本研究で示した概念や方法論を他の諸言語にも拡大できることから，発展性は非常に大きいと考える。

以上より，審査委員会における審査委員の合議によって，全体の評価が「達成できている」との結論に至った。従って，論文審査結果を「合」とする。

| 論文審査結果 |
| --- |
| 合・否 |

審査委員　主　査　（氏 名）有元光彦

（氏 名）村上林造

（氏 名）吉村誠

（氏 名）　　㊞

（氏 名）　　㊞